

231
69
5

準貴

百人一首古鏡三

百人一首古説卷第三



貞信公

小倉山とぬのりみら系んあふ今上なるしあまおとせん

拾遺集 雑秋 亭子院 寛平 法皇大井川

此幸あつて 今上よの行幸といひ上皇よの行幸といひ

宮抄ニハコケクセリリ 行幸もまぬくさあちりと

作せ給ふに 今上定るのり 奏せん

拾遺集小一條大政大臣大初御内太さかといふ

つげ清幸の年月いとさたううと強ていと

延表五七年の以流野の清幸の次ふ

あそとんをぬりして無せせのまら良し
しくいりよ海にまじりては色一
おれは北
情のゆふとくらあつをぬるとひか
常のころ是の上の勅ありて今上の
幸よとあひぬそ知ふふとりてか
かまるとりて人一今志をい
ごと約つけをせよとこかりそ
あひの松ぬき増えあ入るる所
たふと情は忠貞朝臣久は
うれ山本おれみららあ
是のついでかからあ
のしふて唯月

万葉集卷九 献舍人皇子

歌

春山者散過去 鞆三輪山者未

含君待勝尔

古今集雜

あさよりと名な社をては 桜花年まきとる人もは

譜

父昭宣公 基經 之 貞信公 忠平

延喜九年九月 権中納言

近大将と子 公卿 補任 同十四年八月

大納言より 右大臣 任延長

同抄は顯昭帝王系
 因りて定長四年十月
 三日貫之序のこ
 と細きれとかの所
 云ふも母河はたふ
 旁註多しは相
 九月工日相共臨幸
 と云ふこと

二年正月左大臣四同八年九月
大鏡撰政一兼平六年八月大政大
臣天慶三年十一月謝白天
五十七信公封信濃国日本記畧扶桑畧
 ○大井川行幸御幸之考記等所見
 顯昭古今注云清輔朝臣云法皇西川はわ川
 此御幸如貫之假各序者延喜七
 年九月十日也按日本紀法皇主上
 相共臨幸之件九月詠和歌云又
 大井川行幸左近陣記者延長四

年十月十九日也相違之條不審但
 件記無和奇事若大井川行幸有
 西度紀皇代記者一度也今按は清紀
延喜七年と定長四年とあるは
主上お共は臨幸少く
此の御幸のこ
次は御幸

同抄顯昭云件日九首題
 秋の水はほむ 秋の山はむむ 秋の川はむむ
 秋の川はむむ 秋の山はむむ 秋の水はほむ
 旅の宿はむむ 旅の川はむむ 旅の山はむむ
 作者の母はむむ 作者の川はむむ 作者の山はむむ
 伊平等歛 伊平等山入祀

樹心集秋巻の
 けはれはあり

大井川行幸ハ初奇序 友著云

ありていつう君の序代七月の九ると

明のしめて疎なる菊代惜しうまひ

多かり秋もともちしあそんとして

正乃梅津より清松よそひしして

夕月おぼそしく乃山のありと云

け序はたの九その歌の句を

こ是則集江の松老さら大井川行幸ふ

け川の入江の松をむより 頼基集大井川

行幸は たの歌よそ序ありそん中あきさ

拾遺集より延表馬射大井川は行幸

ありて人くよるもせりあひらるゝあそ

大井川の辺乃松よそ序あきさ若もそま

り幸とそたのた手云の序は行幸と然てあ

せり

の大流り大井川清幸も侍しそり

小の山より乃そてり幸にあそ乃歌は

りて初奇はうすはりし仲り

猿山乃ういよさけふとふ歌を新恒

日ひしはまきしる 其日序歌を昔之ぬ

そは 先も序と

なと 序と

頭照注云宛書云
西川即大井川
齊王西河の板と
ふも大井川の
ふくし史等ま
西河大井の流
東河大井の流
りあり

例又之りしとてみゆひ記してきし あはれおのきき

又云はる西川又畧橋山のくしは あはれおのきき

乃にほをいとちるの あはれおのきき

申すつきて日本記畧り あはれおのきき

月十日大井川行幸とあり あはれおのきき

幸く切幸と志くれい あはれおのきき

とく天をいとちる あはれおのきき

人ふゆとくして あはれおのきき

色 あはれおのきき

大井川 延喜七年

今日の日記に... 今上のおまじり

集又法をいとちる あはれおのきき

遠てちるを却て あはれおのきき

はる あはれおのきき

とあり あはれおのきき

き あはれおのきき

い あはれおのきき

遊 あはれおのきき

遊 あはれおのきき

遊 あはれおのきき

さか作しきる時忠平云いかくよし
まろるまろる一なる記録よりあて遊覧
うしとまろるして約るなるんことあつて
後延喜七年九月十下今上延喜七年
御幸ありけなり可人うし
とくく信一 信奉せさせらひ九その
歌詠席等もあつて終ふまろる一
けり人御友とてしつてあつて今上終る
或問曰小倉山の所は拾遺集も
小一系大大和物語もあつて右集の極
改大は宿願せあるは年時なけりぬい福な

さか作しきる時忠平云いかくよし
まろるまろる一なる記録よりあて遊覧
うしとまろるして約るなるんことあつて
後延喜七年九月十下今上延喜七年
御幸ありけなり可人うし
とくく信一 信奉せさせらひ九その
歌詠席等もあつて終ふまろる一
けり人御友とてしつてあつて今上終る
或問曰小倉山の所は拾遺集も
小一系大大和物語もあつて右集の極
改大は宿願せあるは年時なけりぬい福な

延喜七年九月十下今上延喜七年
御幸ありけなり可人うし
とくく信一 信奉せさせらひ九その
歌詠席等もあつて終ふまろる一
けり人御友とてしつてあつて今上終る
或問曰小倉山の所は拾遺集も
小一系大大和物語もあつて右集の極
改大は宿願せあるは年時なけりぬい福な

世乃おのしはとくすは乃わ
いやくのうとふあふ今海友
もらせしよはゆるい臨時のる
執りふる疑ふるを
年十月十日の幸のり約るけ
月八日の既乃の幸の時ち
らとく又延長に年十月十日
乃る流に流のり約るけ
あつれは流のり約るけ
清浦の流のり約るけ

此の流に流のり約るけ
あつれは流のり約るけ
清浦の流のり約るけ

申細言並抄

みう乃京の流のり約るけ

新古今意

いひしししししししししし
かくまてまてまてまてまて
とく先かろるえおひい

拾遺集 在京元方

拾遺集 在京元方
えぬ人の流のり約るけ
あつれは流のり約るけ

改
此の流に流のり約るけ
あつれは流のり約るけ
清浦の流のり約るけ

つらき事ありしに
けしきしよし人
ふくと利ては
て勢師の地の
ふれしとて
ふれしとて

いひ下して下はみかくらりあるり
うら切よとていさりやうていさりまら

〇瓶原の山城と相樂郡よて宇平系
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
都とつひーあこ
つらうらうらうらうらうらうらうらうら
何州見さうらうらうらうらうらうらうら
今く序へ見さうらうらうらうらうらうら
及こ変定乃説を即さるるなり
ふとらる也

或説は都出てしふしうら京いづし
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
泉川久尔乃都乃うらうらうらうら
必しとたのそようらうらうらうら
思し中よつよて序の終は世を
巧ようらうらうらうらうらうらうら
教百その序奇ようらうらうらうら
巧も多し好世乃他をうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

譜

日本書紀
卷之八
天智天皇
元年

祖父内舍人食國公男父在中将利
 基高藤急輔卿延喜廿一年参议
 左中将 如元 延長五年従三位為中納言
 廿八年兼右衛門督承平三年薨
廿七以上公補任 大和お流り境比の中納言とあり後
 撰集又兼輔卿はさくさく好ち依の
 かたり海らのゆりたりのありし此家
 てまて文あり其之の界を延長八年
 二月より出でて承平六年二月瑞京
 せしり日記なりんてありし其
 かたりるなり

源宗千朝臣

山里のれを淋々増りりる人も兼も
 古今集あり 其れありてよめる
 花の去りみらるる秋をいふまはつる
 人目も今をひのさすりりり連れのあま
 もうしあると物いひ山里乃さひーさのい
 つらきことありしにちりい
 山里のれをその二つのでよとり先を
 うつ付ぞ秋をくまふよりふあより

るわー人目くい物まあり人さしく
なる身とささくぬるさくさくを聞さ
まて耳とささく今をんるさくさく
ふさうつぬいさくさくさくさく
歌乃字とありさくさくさくさく
さくさく
さくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく

譜

父一品式部は是忠親王光孝天皇皇子宗子
朝臣ハ右京大夫ハ四位上天慶三年
卒拾芥抄季吟云大和物産ハ宇多院の

花面白うららら以南院のみこ
さくさくさくさくさくさく
存東のくさくさく
さくさくさくさくさくさく
とあり南院を拾芥抄ハ是忠親王乃
家とありけみこさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく

と地のちのいしてよきひといひしとてあつた
せぬやとらひくふこ万葉集よ

島傳足速乃小舟風守年者也經南相
常齒無二こ乃年とやへらんといふ教
そあり好撰伊勢物語と小しけしとて
乃てよとばを考て初

こ初教を和名抄云説文云雨執早教也丁

念以和名ハ豆之毛月令云季秋月是月霜始降

こつちよらり計あ乃初教をこく秋わく
言をこいさあさるる神高といふは
始て降るんるもらひんしこのあ

かぬとねな人乃迫切なるふ近

譜

凡河内ハ古事記云天津彦根命是凡河内

也日本紀も是は乃又日本紀は大内内とふし

凡皇朝上古ハ封建を中古ハ郡縣なり

の其封建の時よとよハ成務天皇

以ち此れよといは異うしてさつれあを

もつらつら今ハ河内也乃らつらと

領せる有ハ凡河内也造と稱せらる

らつら一ハ元正紀因屋命氏從東恒例之也

河内忘すハ因邑被氏ともしえらる

姓氏録に九郎氏あり二代実録云々粟几直
ありと云えい復姓を九氏の河内氏より種我
山田氏云々の訛多きもの九氏とありと留あふ
延喜年中は大津氏と九の字はあら
る後日印紀にもこの氏を云ふ

○躬恒の父祖ハ未詳古今集序云初甲
祖粟几直信又上國ハハ甲賀大廿日
後八位下之
云流路のまづりしは此の往をてさ又同集
謝子預云流路乃任をてさり討のま
老云よりしとひ同集は邊衣乃比討殺すとの
これ中ハ先ハあけり申しておのくち
りりりよかしせとも老も得れぬ討をり

龍北面とあせりなるらりとよみ
流路示預け時よりや

壬生忠興

有明れつとてかみ別より曉をらりとも
古今集云三巻云
女かみくちておのともか
つひさくひしとてあつて
月の曉のほま徒よりされて
かりとほくも程らよと

うし(い)に(ま)る(る)月(は)か(く)る(る)月(は)か(く)る(る)
え(る)ら(ら)好(を)人(乃)は(世)な(ら)り(ら)る(る)
お(を)そ(晴)け(を)う(き)お(を)ら(ら)し(と)お(ひ)ら(り)
う(ら)し(と)

ひ(き)め(を)十(六)お(は)下(お)乃(め)る(る)月(は)か(く)る(る)
し(と)ある(る)お(を)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)良(米)
の(互)れ(を)顔(目)無(乃)乃(並)之(お)強(面)と(も)
お(は)信(を)面(よ)か(し)と(茶)は(互)對(して)と(お)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)

お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)

お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)

お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)
お(は)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)お(ひ)ら(り)し(と)

舊本松嶺 是多シク
 神無実志トイフ
 読此百今ノ編次ニ
 カナフコノ注ノコトモ
 曉不志ノオトイフ
 カナハス

改頭明命ニハハカ
 正しくありしなり
 正しくありしなり
 正しくありしなり
 正しくありしなり
 正しくありしなり
 正しくありしなり

あゆみのついで

あふしのついで
 け編次をよぐえい解をま
 りつる中々そそその
 るつとこころは
 おつたれは

譜
 壬生臣ハ姓氏録云天足彦国押人余後之壬
 生部公ハ崇神天皇之後之け二流乃らら
 壬生とのいんハ彦国押人余此好

壬生ハ大和吉野郡ニあり比名ヨリケ
 氏ガラズク且今ヲみふと唱ふ壬
 和して訓せるは
 の正阿ノあぬ乃忠
 座郡壬生布
 布布とゆひ
 記ノ似借せるふ
 所とあり
 といふ

以英福門を主生氏の遺跡なるより歸し
とせられしをくぐらみかゝる入一也一
こけのしと父祖未洋之代実跡は外従又
位下左近将監主生直益成といふ人あり
祝族也

こ古今集序より右末門府生を府生に
令條より形して後より命じて志乃下は
也人乃府生ありけ陳を宣秋門に記より
左近番長ちりり同集せあるは(か)のり
の身よりしと流る秋の末(か)のり
きあしとくう垣根集りも左近のばひの

と(か)とゆり(か)を左(か)を
か(か)あり

坂上是則

朝のちまきのの月とんこよを神代里よあまの

古今集を大和のあまゆちる時(か)の
かりりちらん(か)か(か)と(か)のり
し(か)のち(か)集の(か)ち(か)ま

雪は暎のり(か)き(か)い(か)こもえ(か)ん(か)を(か)ゆ(か)
と(か)き(か)人の(か)し(か)と(か)ひ(か)ん(か)け(か)と(か)あ(か)ま(か)の(か)
月と(か)ま(か)らん(か)ね(か)あ(か)ち(か)れ(か)高(か)の(か)り(か)ま(か)し(か)ま(か)

はる(か)あ(か)り(か)り

儒者の補せる及位二六位上より
けり蓋徳ましくゆき
西宮抄信村部表書云延長五三九御仁壽殿百殿上人及藤
原重之坂上是則世帯刀長在京相如世帯刀櫻井清々令獻鞠三百
二及揚不陸内職給之云々云々
七差つる比しはははと

王道列樹

山川のうける志らみ流もあのみらり
古今集秋下志賀山歌とす
山川のまき水うららりまらるまれの先
うららり流もをせぬ上は程わがゆく吹く
世の流もを河水を極めくもこれ
畢竟風のうける志らりしとよめ
うららり上句は流木のふとひて下句まで

改
かえらる川の極そ人のゆて
うららり流もをせぬ上は程わがゆく吹く
世の流もを河水を極めくもこれ
畢竟風のうける志らりしとよめ
うららり上句は流木のふとひて下句まで

其のうららりしとよめ解と極めり
ふも又も上よ其のうららりしとよめ
有らりしとよめ解と極めり
此山川のうける志らりしとよめ
孝徳紀に耶麻鳩波爾鳥志賦陸都威底と
あつた乳の万葉卷一人万言也并山川母依民
奉流とよめ解と極めり
こまらみを流もをせぬ上は程わがゆく吹く
せくもを極めりしとよめ
付る物とよめ解と極めり

さて世方の万葉卷の二は明日香川志が
 らに流しせう内せを流す水も此よりあ
 らるなりといふやく川水をせきまわら
 せり或説は片根の山をせきまわら
 の流もあつぬを流しとてぬといふは月
 流を字つて流も不堪不勝とて流あせぬと
 せんよのさきもといふことともゆり
 の志賀の山越ハ頭昭云北白川乃流の傍よ
 じゆりてぬえり山嶽山城は馬せり
 へあつぬこといふあふ志賀へ流るなりして志賀
 とふふをぬふころこの山にあるとて志賀

萬葉抄或説ニ志賀ノ
 山越ハ世ニスルコトトシエタルハ
 女方嶽越トキ峻キ
 流ニテハアヲカレヘシトイハ
 ハ群ナリ凡生山トイハ
 山中越トテ白川ヨリ登リ
 テ志賀ヘ下ル流ナレハ此
 川一凡生山トイフ途ハ此上
 傍軍地流トテオハシメス不
 今モ凡生山ト云フ

の山越といふ極よまきよふ魚一今越山即
 志賀山なりなりなること或説云徳信卿誌
 云往凡生山西行云今嶽は頼基住む
 屏地乃繪よ志賀乃山越の所よ
 名のりて好むとも凡生山志賀の言
 元志賀もよ志賀山とてとて志賀よ
 凡生山とよありといふを凡生山とも
 といふとて志賀山といふも志賀なり
 志賀云むり志賀寺よ志賀寺とて都人
 の往來しげり志賀寺志賀寺は志賀にあり
 志賀寺は志賀にあり又志賀寺は志賀にあり
 志賀寺は志賀にあり又志賀寺は志賀にあり

譜

春道宿祢三代実録云貞觀六年五月右
京人因幡權掾正六位上物部部起賜姓
春道宿祢今大和国春道村ありて
此こよもきこといふ社とありといふも地
名よりいゆる氏よりいへり或説は新名宿
祢一男又延喜元年任壹岐守干特文章
生といふ何れあるもいふ所をいふ
をきこひとも西海の極まり文章生
のいゆるも通俗といふもよき守り六位の

みづのつらむし文章生よりたつたるるを
いしむる

紀友則

久方流のいふまはよあづらうき花れらるん
古今集春下橋のむね教をえてりある
日あてふ風のいふかちるねいふらるる
いふあはれあはれしくも花のちる哉
いふしとねらるるんと惜まよつけ
とくえりあはれをかくちるてふいは

とくしんくわ さらふまきけがくしん
斃よとゆる 好撰集よ ちやふ
ちんてふいさうれいふのふよ何あらん
同しんれうら先をいと芳なり
こ久方の或説云神代志は清妙之合博易
室濁之疑場難故天先成而地後定かくて
地乃場かきこよあして天の成しはちやけ
4い久しく思きあといふう又地をまじら
こしもありしと天をち久は留固うさけ久思
しんふへいさむあひと 在神代志あるに神の海はしんふつ
つる神代の海を由こしんふへ
聖のいふつと用の流ありのまよひ維をといふ人信んたこれとあはれ
八月と斃しんていさうとさういふれ維はりくとも

昨云後日本後紀は皇極志の傍々作らる也
文は甄首乃天と書しをこまきちる借業
まきいさう乃天と書しをこまきちる借業
こ乃下畧首をかくしはもつらう是を後件
説をいしことやうあてりあまあくとる介
案よりしくは空を甄の内乃丸く虚なる
まあしんくもの異終はしんるもゆるん
わとあしんくもの異終はしんるもゆるん
ゆるしといまう澄按とありふれされはも
らしんく

ちやうくおてしなむを（或説は何准等年或等年と押さこころりもいおえん）
 字といふおよいありしと多疑の河上はあせの清原をて下よ
 りんとしそりりれんの流乃始流こあえまの氏ハホ平治を
 けられおえし思されのまうてても上はあえんるんるあ
 せい下はらんとしの侍もまう多しこるをさるるあう
 立ふりるそそよのしんのしらんをれ色のしりりあぐぬ星ハ
 あししと後もあせしと（花）あしとるるあふんてよのしんのておこ
 んとあせもあせしと
 そ又通せぬあせしと

譜

紀氏古直記云建内宿祢之子弟九云木
 角宿祢者木臣都奴臣坂本臣祖かくあり
 て其先を木（中古より本と改）角宿祢乃後也
 友別ぬの父祖を未詳一説は宮内少輔

今

有友子也（しを）按は有友乃女也今集又入し
 同集は友別の父乃并しとてこころり親を此
 りて免のつる時乃女もゆ中木内氏（同）は侍の
 推量しぬとて引ちとあてしし説いを意
 のりやうせい海はもあてしとていふこととを
 らぬぬ童しゆゆせいかくさくしきまもいふこ
 こた今集序は大内記云は是徳志の友也今
 以下延喜式西云抄等し其職掌はあり日今
 集ははくしゆりりる時をうら道ひと
 基るらりるとあせいけくの極目形と
 ぶあうりんとあせりりりり今集概の

中よりゆりりん表傷乃部より也

藤原奥見

流るるも知る人よせん砂の松もじりたれよのふゆふ
古今集雑上 凱とくす
いづも老きててま中よじりてのなれそ
さあつとらりふふふふふふふふふふふふ
とよふよきと先て老る 松れゆりて
るさるゆりてれよひととちかゆゆゆ

せえそれとよふなるとくくくくくくくくくくく
いそぬ物とてよりじり乃友ゆりて
出い今いひあつとふ老乃友ゆりて
れよとらとよふも老て好のんあゆゆ
出てけけゆあつとよふ人乃ふを
らしるよじ 拾遺集よ 昔とく
いあゆらよせふあゆとよ砂の松れゆりて
此教古介よ多し
こ或説よけ介乃高砂と山乃物者こと
いつは流るるあつと物者といふ人なぶの
みさるは好撫集よあは性流所花山

さて道俗酒あへりるふとて
山守いそいそおんさぬの屋上の栞をりて
とくわき 顕昭古今秘伝よとれ家言に播ち
る所屋上星とふ所共續は松乃あふさる砂の
屋上乃松といふ物して乃山とさる砂を
と屋乃上とりふよありあつて亦よとさるひて
ありひうくをくきけ説をういふと松
はしん古今集序は高砂伝のえ乃松も
相あい乃やよとさくしよ母老松乃名
ちるき地名をいふく對句をとせり且も
あは乃文法集中乃并のしるを

あけてちりたのうり
誰れも知人よせん
あへてしるるぬ伝の記
此等とあけてちる物かく伝乃いよ
對しるるを名あふあつと
くろ文も不穩且とべくは山乃書
と老よりと乃しもいふす好世乃
人の古今集ふくりかしてして後近れ
ゆりて限りぬくやまよとさるひうんと
しるがなるかもしあふの解を答ゆ
ぬしよやるとぬ又相老乃義とる

相とるにありとさひいひこれに引るは
可しゆく前なる文の法おと集申
乃おと引平これとけおのしよをよと
さこれいあぬ送をいけけるをいつ
乃を見ううかく解とさい男山のむ
とあひいあく女命花のし時とら
いふ又弟し破竹のあひありとて
おとぬし乃文のよらしとて
いけらた文をいん人おと
こ誰ともい誰かうとて
なよあしとていあしとてい

譜

父道成参後漢 成男 号院藤太下總権大掾延喜
十一相模掾従五位下抄若芝又たま乃川
掾とらとていあしとていあしとてい
はあおの料又奉るのし

紀

人といふとさしなるは花ぞいし此書よ白
古く集あ春上初集よまうつることよ
りか人のあま久くわらわて福をた

萬葉云
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に
 八幡宮に

不知ももせりまゝくしよふさるるを
 とふ所よ世前より上よいとて下
 ちととけり且にほろひつるもの
 ぬりし乃濁音は通ふゆゑに
 率乃字を同辨別言するを
 けりといふはあつちりつるを
 久しくして来る故なり
 の泊瀬寺續日本後紀曰兼和十四年十
 二月壬辰勅大和国城上郡長谷寺高市
 郡壺坂寺元来靈驗之地也云云二代実録
 云貞觀十八年五月廿八日甲辰先是律

師法橋上人位長朗申牒備大和国長谷寺是
 長朗先祖川原寺執行法師位道明靈毫年
 中率其同類奉為国家所建立也靈像殊驗
 云かくて貴きこととぬく流るる
 こと
 の此こふといふ万葉集に其まこととけり
 こととあつちりつるを
 たてるといふ神代卷に所植湯津杜木此云
多夜古今集に男山よりあつちりつるを
 と女郎花とつるをかくも家の庭とよ
 せとてあつちりつるを

こけちを室坊之と名を何くはしとよきて
推量の説之此里よある何宿よとよきありし

譜

紀氏の初より其之ぬの系譜或説曰
武内宿禰より十一代紀本道孫望行子也此説
未詳始祖ハ武内宿禰乃男木角宿禰也
さしてはなさぬくよつれとていひ世の流若
ささうさすよくさ位すぬ人の傳乃とて
たるハサ一友位ハ古今集云は書所
預西宮抄云在式乾門東掖有預書乎和名抄云蘭林坊在式
乾門東今令カ力御書所是也拾芥抄云侍從所南在公御

副当預
并書乎

作者部類云天慶八年三月廿八日任

木二頭同九年卒續世總物語云院の宗依りても此路
ことしといふことありしとありしありせし木

二乃權及とをりけり二乃權及とをりけり
ことしといふことありしとありしありせし木

新撰和歌集序云云此从今云掌
仙寺僧尼名

藉蕃客持見燕饗及在京夷秋監當館舎之事延七八年十一月二日
二日土佐よりつりしありし
ち依り此より中平五年此任

及はしし及はしし
ことしといふことありしとありしありせし木

鐘怪妖艶の歌をこのます鐘怪妖艶の歌をこのます
ことしといふことありしとありしありせし木

十一條の割
 の割トイへルハ唐文
 フラフストイノコト
 其割カカニクムコト

十一條ノノラノ名ニヤ
 是ハ初ニイヘルコト
 其在滿ノ使文
 イコレモアレハ文
 著モノ、イハレ
 キフコト、其後ニ

て此詞をうける。おど古今集仲に入るといふ
 うらふとつひくみかきとく一考さし入らむ
 いさあふんよのいほひて其味をうたれ
 る人がまよや且右乃弁をけをうらむねら
 いさあふんよのいほひて其味をうたれ
 山乃井のあらむと社福と申しはまきささ
 よいふあくせし福と申すいほひておちか
 びさるらむとく

こ和文を古く記すに記すに申すも其意
 なる辞とし入しは後詞といふをいほひ
 しはゆきといはれぬハ唐文をうらむ
 文題をうけるともあるもあつても和語和文
 のあつて一考さし入らむらるる集仲入り
 以上乃弁のうらむれを極と考ふは人
 二至りて弁は古詩古文の巧をうらむ
 仍らゆきといはれぬハ唐文をうらむ
 こつたふらむらり一考さし入らむ
 弁乃一考さし入らむらり相ひる考ふ人

清原深谷の文

其後ハ詞といはれぬハ唐文をうらむ

古今集夏月のあかりのあかりなる夜は
よけらうとと先うくらぬを——さて凡そ
のわい郭の鳴り響きり湖のさのせんといふあ
まの只は祀わらう社湖のゆるるるをい
月のひなまをいひのいひあけとあけ
と夜ようらとあかりし月と入る月
はさのうらとあかりとあかりと名
おと——とあかりとあかりとあかりと
いとふらとあかりとあかりとあかりと
さりとあかりとあかりとあかりと
とあかりとあかりとあかりと

古方集よ

沖
さうひをうらまぬらうら
こまねねけい乃ふく付色
こらひをうらまぬらうら
こそこのうらまぬらうら
祭神うらまぬらうら
おとらうらまぬらうら

こよせしとせむるかゝい此仰く後いかにあす

譜

清原をい人の姓氏録云敏達天皇孫百濟王

後也印本より百濟親王とありしと敏達帝の孫といふも親と

洪字衍字多し中ハ後いし親とありし上言の今も後と

ふもけれを揚ゆらるるやあ史に指示とされず

もけ人の先と定こし知とも大系因り合

人親王五代孫房則の男とす物これ探の

且後五位下とあるせり

但三代安孫自觀元年云私岡王秋雄王良田王三常王徳絶王徳成
王廣貞王廣益王廣深王山村王高陽王清陽王十二人並賜姓

清原真人一品舍人親王六代之孫也といふはかよ房則
の傳をいし考

文屋朝康

白高よれのきこく秋のかつあきこあぬおちりり

後探集秋中 延長御時分りあやり

吹色乃秋れの初まらく吹こさるる羊家此

あも吹ひてこゆるきりきき秋の吹れさぬ

くく摸ーく出ーくるあこ上よ白ああり

れの吹ーくく置て下よつあぬきとあぬ

あさらりらるとあつけいていもれるがあひら

きこ

こ吹ーく吹頻之仁徳紀よいーけき山

いへりてしとよまむのふい後のむねのふ
くもくはるふとと宗祇紀より重なる事
のむせしと重なるひしてしるはのむね
と今をせしむ

こはしめきりあぬおとを流して昔もあ
むられしむら集りぬみする人社をら
むむれとよあつてのうきむ
この説はのむねのむねの記す
且もあのおきむらむらむらあつとよ
を流しそむらむらむらむらむらむら
のむねのむねのむねのむねのむねのむね

かむらむらむらむらむらむらむらむら
よのむらむらむらむらむらむらむら
のむらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら
のむらむらむらむらむらむらむらむら
近野のむらむらむらむらむらむらむら
つむらむらむらむらむらむらむらむら

こらむらむらむらむらむらむらむらむら
ふ害あり新撰万葉の先もむらむらむら
五年后また今乃新撰万葉の先もむらむら
のむらむらむらむらむらむらむらむら

うらやまする先貞親王家方合々。秋の那
おくふまおのむらさきおとよおもけあも何
く新撰万葉集ののらうらうらと延喜附
先しよらうと昔おこころももりらるや

譜

父祖未詳或説は文を康秀子大膳少進
先孝天皇仁和之辰延喜三年大会人先
こもゆきと何乃去よ物なりといふねいなきこ
又仁和の比とのいありも傳りもたるとたの
く寛平五年けあよむいけらうらか序

おもえれねい姑初乃はら延喜のほりて
しる人うき

右近

らす物かといおもしす折らひし人の余れ情は
拾遺集意 訖しらすと

こころはしらすとらうらうとそつ男れをれり
くれいらすとこころはらきいんてとらん
らうらうとらひしる男の命とらしらす
らんしらすとらうらうらうらうらうらうら

てさうらひのらふかよあをど却てつら
ふおとそ人かたしひこもまふ人かたし
きこひまふ人かたし田山おとそあつて
とふおとそとあつてつらふかよあをど

後撰集の信明

院しを日一とあつてあつてあつてあつて
同集ふ人乃んがらふよれい右近

ありんとあつて人かたしあつてあつてあつて
けらふひて一母一男とあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

この大和お流は男のつとめとてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

譜

父大和物語は季繩か將の娘 右近故に
乃宮よさひひらひらひらひらひらひら
か將とてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

明久一或抄は辰文と七條后穩みとと
七條后温子の寛平の辰よかきし穩よの延氏の
辰よきとせし七條とゆわひさるひしとるう今葉よ
七條后子^温つと人さるぬ一ぬ^辰或抄はまよと
流れるとらんてら

参議等

海芽生の山姥の山條末也^辰とゆわひさるひしとるう今葉よ
後撰集志人^辰はづりしるる
先を七今集は海らふの山姥の藤末也^辰
人さるぬ^辰やふ人ぬ^辰やふ^辰とゆわひさるひしとるう今葉よ

真梅より集奇ノ
是フハ志志フニ用ヒ
此奇ノ志下堪志ノ
用ニ

又て二の白いそのふ原之志一とゆわひさるひしとるう今葉よ
ら一とらぬ^辰也よとこひしとるう今葉よ
こそあふ^辰とらぬ^辰人^辰の志一とゆわひさるひしとるう今葉よ
わらん^辰とらぬ^辰とらぬ^辰
こあふ^辰とらぬ^辰とらぬ^辰とらぬ^辰
袖こそとらぬ^辰とらぬ^辰とらぬ^辰
海乃字も^辰とらぬ^辰とらぬ^辰
とらぬ^辰とらぬ^辰
こ海芽生のふと甚也のけるとらぬ^辰
葉集^辰海芽生のふと甚也のけるとらぬ^辰
とらぬ^辰とらぬ^辰

楊麻之麻系乃下草等此麻系とてし
たしよんき何ふくはあつたともふと
洲一神代紀は粟田豆田ともあつた
うと洲一神武紀并は阿波部神破
流羅毗若茂苔とあるところとて
この所の藤系なり也なり此はあつた所にて
御芽とてなり也なり此はあつた所にて
小池とてなり藤系といふ人の料のしよて若
名ふもなりなり且藤系なり也なりといふ
所なり此の二句なりなり
この也ふの胸中なり押へおく事とて流し
す

古きよ也海也坂也思等此也さなりと洲
とるなりなり海也なりなり藤系なりなり
なりともお分してなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなり
あり且ちなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなり
して揚りなりなり編なりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなり

譜

按祖文差派天皇一世源氏大綱云弘

父中納言希々二二九杖桑畧記云延元
畧記云天曆元年四月廿六日辛巳以右大
弁源等朝臣任参議公補任三月廿九日
云天曆五年正月叙三四位下同月上表辞
参議三月十日卒七十一

平兼盛

母中納言希々二二九杖桑畧記云延元
拾遺集志 天曆乃并合天曆八年正月
いとうくし二二九杖桑畧記云延元

ことおらひ二二九杖桑畧記云延元
ことおらひ二二九杖桑畧記云延元
てらあ二二九杖桑畧記云延元
ことおらひ二二九杖桑畧記云延元

口万葉集卷十八比主此家持々二二九杖桑畧記云延元
安必意毛波受安流良年伎美平安夜思
苦毛奈氣伎和多流香比登能等布麻泥
ことおらひ二二九杖桑畧記云延元
の洞より二二九杖桑畧記云延元
奥野おら二二九杖桑畧記云延元
をいふと二二九杖桑畧記云延元

こいふとせしめしるハ兼盛のハ此等と
ありしやあやあしくいふはさし
このおはかきり

譜

平朝臣桓武天皇皇子一品式部卿高原
親王男從四位下高棟王天長二年閏
七月賜予朝臣姓貴左京是始兼盛
のハ大系圖云祖父與我王二世^孝父平
篤行^家皇子云兼盛本以王氏为大君天曆
申之歸本姓今按本朝文粹朝臣ハ天

曆四年我前權守秩滿て後位少て七年
天徳四年上書して勤解由次官并圖書
及乃^刻之^活中^ル文^中又兼盛少日入
学多年編蒲道奉寮試已以及兼盛云
總^謝氏^爵云^け時^何等^の位^らして
しる天徳四年を從五位上とせん
うらたの活をゆるとして大監物又
補せし^し一^の形^之一^の後^は天元二年又
の^後河^守の^守也^申文^は從^位上^大監^也平
朝^臣兼^盛と^んし^てけ^けし^し
よ^と兼^集よ^とる^ハ字^形を^けし^し

平島乃の子つゝいこしよ五氏を傳つらうし
を兼盛ぬいりて五氏と稱するあやふ勃
しく二夜と稱する程さうい証源或の申文亦
おもんて且又お氏とゆりて乃歸直とと
やうもいさいとちの申文の根のさうい
ゆといみしゆくとあつくり後撰集とい
いこころ兼盛とあるとて附せせう説
つるく——此中を兼盛をばせ流らると
らむと仲ひらとさういせうせう教集
よ多あれいんしていん——
こ徳孝子よ天徳新合とゆりて其をさうい

つら村上天を年号乃仲よ天曆ハク
あれい拾遺集より天曆乃流付とあつ
るものこ

壬生忠見

あつてよころあつたにやうい人あつたよはひはあ
拾遺集よ天曆乃流付合天徳右

人さうのさういひとあていまいひもあつ
果目くいともあつたよとあき名のさ振る
くのうらよ社あひらとあつたよとあつた

つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく

つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく

せん

つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく
つらひのちみよきくまひくつらひのちみよきくまひく

つらと即ちよしつらつらなるがよき家業よ
知るるのゆるむにふしむるよし

譜

父忠太の家業は内の子として父の
祓り家も中として先づもよきありあてし
ことだの才と好くはれ昔人よきよなる
君の代はさうありとせむしむるよし
或説は天徳二年播磨大目とよみ家
業は流し入る道とよき又の伊勢
いさむるよしありあつらふれぬよし

そまごの梅廣なるひびきのうきことふいば
いさむるよし

昔つらぬ名よりいさむるよししし
伊勢梅廣なるの記もゆるしむるよし
あまよし前合の時分興して田舎はゆる
とよよいゆるるよしありを家業よ京の
たふらゆるるよしはのあまよ海にゆる
ふゆる人のきを何しむるよしむぞと
いれは

たよありいひぬればの記はゆるしむるよし
いさむるよしありあつらふれぬよし
天徳二年

旧の補ぎとて送書なるや今をあたはして
多々よらち入りてすいや一人ら書なるある
ういふこと又志集のけのあまた事ゆかたり
うきもりかざるや其時のみうこはしう
てはあけさせまひてらりおさら^よ名人あ
ゆりておろそまらるあし^たよありとい
終にして作るひらる
見かとも何ともす^す類取はるるにて
うらふうらむは^はまうし^す
はうしのまはのふま^らみらうし^はや
るうえい^し時所の^は外なる^のひ^をわく

六位の名人よちうらう^り又家集前帝^乃は
時^に河内^に移住^すと^もい^はん^所にて^は尉^子
あ^まさ^しく^しと^作と^{あり}と^いは^して^な
せ^にの^めら^りら^れの^奏せ^しと^いは^して^な
して^は名人^のい^はし^る
橋^をた^まむ^むの^むら^しと^いは^して^な
とい^はぬ^こと^はい^はし^て
お^もひ^てゆ^んお^もし^てた^らは^して^な
わ^らら^しと^いは^して^なあ^らて^は尉^子
と^いは^して^な
と^いは^して^な

日本紀万葉集 餘の
さくしあことし列
こ又たのまをわい
何たりせしこ

こ末松山を古今集 佐奥守は

君をたがうてあししむらひの末松山故也

こいふを奉りてさくしあことし列

むろのふいあさひの山故に必は故のいふ

こいふを奉りてあししむらひの末松山故也

代するんもあまをいしとく極てあししむ

あししむらひの末松山故に必は故のいふ

同しむらひの末松山故に必は故のいふ

更西よむらひの末松山故に必は故のいふ

らするも春秋のころにさくしあことし列

ふも使河如常泰山若礪さくしあことし列

のからりてより大なる末松山をたがひしむ

あししむらひの末松山故に必は故のいふ

うら

松中松末の松さくしあことし列

此松とすまをいしとく極てあししむ

あししむらひの末松山故に必は故のいふ

おひよる

譜

祀父儒養父文顯忠守元輔肥後守

と大系國よんしむらひの末松山故に必は故のいふ

云天曆五年をいしとく極てあししむ

西利お産は坊うれてとこいへくせふこ
とをかじむる河内掾は東元輔三定
家々掾撰奥あふと河内掾とゆり又家
集は海邊よりとあれいそし梅うしよ
又家集は二月方其子院りて又傳り
うしよとさうとさうと
年六月卒一とゆれい上位はゆり人
一

権中納言敷忠

孝子お好のふくつあれい昔はねとありいりり

拾遺集志類一

ありぬるのおおひをいんこいすいこひつ
ふいひきくのあひをねはねまからして
こいあよあひえせありぬいぬのふちねふ
とあねまあふれをさうらとこい今ちね
よけけと坊の朝らふよ入らうとてをいよ
くめくうし且好撰集よけ中納言をいひて
西園及のあ南よれこくゆと父のた大に
あてせい一ゆりこれい
いふてかおひとふいふる人徳も思はん

中納言朝忠

あるは絶てしるし中へふかむを恨む

松遠集 天曆正時行会

昔もひすしうかめきまのく深く

慕よよをすうふきもゆらるぬ所

しこらさるのせりしけい合のら

こととめれうもゆもしあつた

こ或説又世中へ絶て極のよらりし

しうりしうらそのまもあてかめく

流しものしきも

改
中納言朝忠
けつてつてしうら
て信えれりし
向ひ葉と欲
はつてしうら
はつてしうら

の中へい万葉集又中へとせしるを
借よとあし其志のしきとせしる
るしふとされだんか東へゆえん
道とせしる外へ西へゆえん
らん松のゆえん
るる

譜

公の補任云父三條太政大臣

山陰の女朝忠の天曆六年参議従四位上

宮内省中將とす大和朝流し
中將とす補任殿又死
同十一年 天徳 右

衛門督为使少当天德五年二月改元應和元年二月改元正四位下

應和三年申納言同十二月薨

考云御中納言又地

今昔物語云三條仲綱云といふ人ありりり三條太大臣の侍子なり才かしくこれりこころのよけよの路ありなり

謙徳公

長きことあり人におもひをせむるものなれば
捨遣集恋ふものひらる女の好りはれ
うきゆりて文よあるすゆりしれ一條の拾遺

今文のころへあつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

あつたにらんぬにさ死ぬ

従子... 曾根好忠

初月... 曾根好忠

死せ... 曾根好忠

ハ死... 曾根好忠

いせ... 曾根好忠

父... 曾根好忠

譜

祖父... 曾根好忠

圓融... 曾根好忠

執行... 曾根好忠

同三... 曾根好忠

封之... 曾根好忠

曾根好忠

申良は河海舟船人からいふこと新嘉もあつた
新古今集抄云 此らに

その好撰集は小北小町の海士にさし補く
船乃棹をらみそをうに海の家をさしき
古今集は 亦あつていふもさすこと
あつた限りと物あつたりをたよる海士
申は棹をさし新へしらぬとよささく
て好撰ことさしあつたきよらたよく
たうも乃をそれいふは海士のこ
申は棹をさしたんあつたことさ
余がさし此新集さるふは確たるはけしきを

或説は舟をたしあをらりし舟師なる
河を舟に棹をさしきといふは
うくさしはるるなりと

こ申良乃と紀伊あつたり万葉集巻九
朝開擲出我者湯羅前とありしと紀
伊あつた幸此時と

ここといふは海の上界を海門水門の門と
仲哀記曰自穴門至向津野大濟為東門以各籠
屋大濟為西門と又明石の大門を海門と
也万葉集卷十七天保川にさす天漢川門
座ありしとけし證多し後の言とあつる

沖説は八世忠任
舟師採集は舟師
舟師なるしと
舟師なるしと
舟師なるしと
舟師なるしと
舟師なるしと
舟師なるしと
舟師なるしと
舟師なるしと
舟師なるしと

俗説とゆふとていふる事ありしに
このころ方集集まらるる方とてあつて
別々のこれらをして彼まをいへとせしむ人
初末とせらるる事此れ彼ますまらるるも
初末とせらるる事此れ彼ますまらるるも
初末とせらるる事此れ彼ますまらるるも

譜

曾根連ハ姓氏録云神饒速日命六世孫伊香
我色雄命之後也天武十年十二月紀曾
祢連韓大等授小錦下位この齋宮
好忠父祖未詳丹後楊ことこのま之集

そぬのうらたはるあそりつるあそ
そよふれは位馬ふも任せしむるし

惠慶法師

八雲集のけりる宿れ漸きよ人社みよ秋の年
松尾集秋河京院とて書ける宿れ秋と
ふんを人くよみゆるま
そいぬのうらたはるあそりつるあそ
亂之されは院のむらしあそりつるあそ
しきよれよきらるる宿れ秋と

いよしく淋しきもの秋のさしふる人をも
秋のとりよてふさはうき味して都なり伊勢
物風なり

津島を荒る者の従いきとわらふ野のこぼる
きの仙路より今いれ難なりとらふしつり
つら相違ふらと新撰和分集 昔らく

同人もなき岩より来る花を八重をよみし
同人家集

八重をよみし岩より来る花を八重をよみし
河東院大匠融云此家之庭を境の浦
小遠りうし難波より遊とこころせり地や

せうとせし名園にほ頂の枝をと根のお耳
よみらるるる花よみらるるいすすさそ
けあきもき着置るやい人乃たびくまはまを
わしあひのひあゆりし詩可多か申よ
昔のゆい乃君海を桐多しおこらまれ
んを心おちるさしゆり

譜
父祖未詳

源重之

凡といふ事ふ殿のおるゆゑにいつておぼやかし
河原集を冷泉院東宮と申する時百十
の分ちりりる時よふゆゑ

其後云々してとら
たふまのりくま
ふの言ハれう
このいふまのり
わすの言ハれ
ふの言ハれ
況んと思ひ

いふ事ふ殿のおるゆゑにいつておぼやかし
河原集を冷泉院東宮と申する時百十
の分ちりりる時よふゆゑ
ふの言ハれう
このいふまのり
わすの言ハれ
ふの言ハれ
況んと思ひ

雨零者蹴都山に於る觸君之権情者不
持古今ち此

いふ事ふ殿のおるゆゑにいつておぼやかし
河原集を冷泉院東宮と申する時百十
の分ちりりる時よふゆゑ

譜

祖父貞元親王清和皇子三世後五位上侍從兼
信不如如 云々之めしを或説云冷泉院東
宮の時帯刀しとて家集云ある帯刀の
長云云又云云之帯刀しとて時春宮の

所免一にれいそくするそのふありたるは申
と考らるるにたふふくはあれはけさへ
くして陸奥國官よりつてありたり
へ一任乃同の年乃中より実方陸奥
に陸奥之入新といつてもぬるのこし
こころんとしてつるまゝに獲て年れいそ
けありつるれい女以下は友のゆゑ一見
兼備二年陸奥より母つらつらと系
因指其抄等よんじり

万それ所をつてねて
たつたけは業よりつてあ

陸奥國官よりつてありたり

大中臣能宣朝臣

湯坂守留士乃つて大北がりのいふ説はつたおぼし

河原集志記に

おぼしはつたおぼしはつたおぼしはつた
たり定立なりとこれと宮内又留士乃焼
大はつてこれの夜をりつるを信つといふ
之説はおぼしはつたおぼしはつた
おぼしはつたおぼしはつたおぼしはつた
ののちうんちの相あるものよはつた
い文とある一と一且第一の句一に
らるるのつてこあるを説じておぼしはつた

陸奥國官よりつてありたり
大中臣能宣朝臣
湯坂守留士乃つて大北がりのいふ説はつたおぼし
河原集志記に
おぼしはつたおぼしはつたおぼしはつた
たり定立なりとこれと宮内又留士乃焼
大はつてこれの夜をりつるを信つといふ
之説はおぼしはつたおぼしはつた
おぼしはつたおぼしはつたおぼしはつた
ののちうんちの相あるものよはつた
い文とある一と一且第一の句一に
らるるのつてこあるを説じておぼしはつた

手て別て作者を志すこと
たしむるにせしむるに作者は
多人の手てつくられたるものと
すべし也 然るに其の類は
二曆三年八月九日七上歳
卒すとありはれはれに元十
二年にせしむること也

そのしほひのほつといふまきを下にの
つとひて上へもかよりする例はよきまの
所はふつ如く且ほつをた今集まると
うましくしほらん係氏物流はまきもほ
らるゆりはれといふは目くくのまき
ゆるりあそひつらてあひあひのしほ
好税集あ

かくあるおとらせられをほそきほの
まきも下へれはれはれとあそひあそ
ひほほきとあ集とあそひあそひのほ
とあそひあそひあそひあそひあそひ

改
延喜式云れ苗官之後出入
内官長五位以上、称名六位以下
称姓名、然、后、聽、之、其、官、門、
皆、令、衛、士、炬、火、周、門、亦、同、
又、云、凡、官、門、者、並、令、衛、士、
衛、之、云、云

とてふをせられしをせりても便は
方の山つとらる元きて、大印、後、之、官、衛、令、云、此、門、
入者、云、其、官、門、皆、令、衛、士、炬、火、周、門、亦、同、左、
門、の、り、う、る、也、且、衛、士、の、諸、国、は、軍、園、と、し、ひ、て、良、
民、乃、一、丁、の、中、より、う、ら、ら、り、て、軍、る、と、ら、
をせ、お、く、し、を、兵、士、と、し、ふ、
軍、園、の、大、毅、小、毅、校、尉、主、
帳、等、の、外、武、の、友、あ、り、て、兵、
士、と、し、ひ、
其、兵、士、の、中、少、く、あ、り、し、ゆ、を、衛、士、
と、し、ひ、
交、替、大、宰、府、へ、遣、ら、る、と、防、人、と、し、
交、替、ら、て、衛、士、と、し、ふ、を、音、形、と、し、申、せ、
ら、る、を、守、り、と、ら、り、中、務、集、

みきりし富土此故大よりぬともかふのうら
ふはらけ

譜

父神祇大輔祭主賴基朝臣也能宣朝臣祭
主四位大^中臣朝臣按日本紀續日本紀
始大職冠中臣連鎌子公藤原の氏と賜了
小よりて其男力なる系と稱し其後文武
天皇皇時神するは傳とらとのいむ姓中臣又
かつるなきより勅ありて藤原意義麻呂
又中臣より又意義麻呂乃男は麻呂稱徳
天皇慶雲二年中納言に任すと大の字と

稱して大^中臣と稱せり け人光仁天分室室魂三年
右大佐に任し後二位を授

中臣と稱せり 在瑞言意義麻呂を譲ふ公は男と
いふ又白二位

後世卜部氏と混して傳説をなせるいふ
鑑云これ子とすを治て遠公を先祖と入んとの傳説と云
中臣に末のいふ乃孫國是れ子とす又國是れ子とす
物とすいふ守續日紀の伝言の傳言の傳言の父を
在るといふあり

後世卜部氏と混して傳説をなせるいふ
傳説いふへ神りありあつる官は中臣

は祝詞を宣齊部ハ幣帛や領其下にあり
て卜部を只由卜解除等といふのいふ

史とみる 又或説は昔中臣を改て卜部と稱するなり

とふらむの氏姓の根をとりく人の説
て天武天皇十一年小井十氏の姓を八つと
つらむ時其人を第一姓を第二と
と申はるに姓はよて貴姓に下はる早姓
たよ守るるの姓するまことらむといふ
貴姓乃申は早姓よりんがし年一乃
ほせぬもの人に代実録はかた先出自雷大
臣命之形とりふ河をせ入れと雷大命
こふ人もおほみさす皆偽るもの其況に代
実録の古事よりたの文に一且下はる氏
と伊波宿禰と必物一りらむ部は年一後高
録

るて明を担けるつらむもいふらむ
いれ書と根見せる人をとらけ論をくらさ
しとて終仲平あ人持おるとい録の古事
されは疑を形一する乃とこおを偽るよを
うくいはらむ一しの好むと天下は見え
する人らむい時よ人をとらけとらひて偽
らるるそりて事おらるる形偽り

藤原義孝

君のちとくしかりし余もあはれむ
婚指送集 志をんなのしるからゆくと
はらうしるる

あつぬ程よそ何そいふのあし余をあふ
おー入のこまてとひはらよ一たのなめ
うけてまゐる肉あはれふのいして年ぬ
かろ命もくもあはれしとこひりる
こごあひりるるるるるるるるるる
こ上れぬるるるるるるるるるるる
わらひのぬるるるるるるるるるる
きとるるるるるるるるるるるるる

改定後
いふとていふとていふとていふとて
いふとていふとていふとていふとて

哉、只欲の務を上げしに
こゝ意のうらむとゆとりぬよるるる
とるるる其心せす且新衣今集への
ふらそねまはらうしるるるるる
あまそまふしるるるるるるるる
まを多て用いるるるるるるる
まらうらんのあをあし社

譜

父謙徳公弟孝ぬし
下まで天延二年九月卒
孝徳大後ホぶるる
おにハ二月卒とす

弟花也汝は後少将としつるゝハ兄奉賀
のしとあサ将と稱せしこと行成今の異
母兄守こ

△作者部類云天延二年九月十六日卒云

後少将と云者秋云義孝少将

△作者部類云天延二年九月十六日卒云
後少将と云者秋云義孝少将
此の事は...
今遊極樂界中風これ...
後少将と云者秋云義孝少将



三

